自治会共闘 四月下旬に再び全国闘争

4・26 全国学生ゼネスト

27、28 野戦・国会包囲デモ

全国学生自治会共闘は、三月二十八日から四月一日までの連続した野戦病院闘争の中から、四、五、六月闘争の展望を切り拓いた。その闘争の基本性格は、安保＝沖縄闘争であり、沖縄B52撤去、野戦病院開設粉砕を基軸にした全国侵略拠点包囲の闘争である。四月闘争は四・二六国際学生ゼネストに呼応し、拠点校先駆ストと、二十七、二十八日の野戦、国会現地闘争を一つのものとして闘い抜くことである。全国学生自治会共闘は、七月に恒常的な全国学生自治会共闘の発足をめざし、今春期闘争を戦線統一への第一歩にするあらゆる努力を払う。自治会共闘は全国の学友にこの闘争への結集・支持を強く呼びかける。労働者・市民にも積極的な連帯と共闘を訴える。

参戦国化、アジア核安保への接近を粉砕せよ！

四月一日、劇的に発せられたジョンソン声明は、ベトナム戦争の最終的煮つまりを告げた。急転換する国際関係の中で、佐藤政府は依然として侵略加担の露骨な攻撃をやめてはいない。エンタープライズ寄港以後の日本帝国主義は、日米共同宣言の具体的措置を、日本本土ー沖縄の全土総基地化に設定した。ベトナム戦争がテト攻勢以降の窮迫に応じ、全面参戦国体制への質的な移行を、軍事・政治・イデオロギーの全戦線にわたってかけてきている。沖縄の嘉手納基地へのB52の常駐・ベトナム直接出撃を頂点として、本土の在日米軍基地・施設の基地機能の侵略エスカレーションがとみに激化している。板付・伊丹・羽田の民間空港も米軍の輸送機のラッシュにみまわれている。さらに港湾施設は、米軍の破壊された兵器類の積み込み、積み出しがはげしい。一口で言えば兵器、物資、兵士の補給、修理、中継が大規模にエスカレートしているのだ。さながら臨戦体制化の様相を呈して、日本本土ー沖縄は直結して、戦場の直接の後方陣地の役割を果している。

かかる中で、B52沖縄常駐、野戦病院開設、成田空港設置が大きくクローズアップされてきている。この侵略拠点を通じての参戦国体制への大幅な移行は何を目ざしているのか？第一に、エンプラ寄港を強行突破した佐藤は、それを布石とし、本土ー沖縄の侵略拠点の駆使により軍事的加担体制をなしくずしに強化し、従来の外交的・経済的戦争協力を質的に越える軍事的直接加担に移行させていることである。第二に、この参戦国体制への国内整備を通して、現行安保体制の枠を既成事実の積み重ねにより突破しつつ、七〇年アジア核安保への接近を押しはかり、第三に、第一、第二のイデオロギー的表現として、核・国防論議を意図的に浸透させているのである。マスコミ、国会論議を通して、核武装問題、現行安保の事前協議問題、沖縄返還問題をキャンペーンし、アジア核安保への国民世論の誘導を促進している。かかる状勢を「侵略拠点の加担エスカレーション」を通してのベトナム参戦国体制への移行＝アジア核安保への接近」として明確に把握する必要があるであろう。佐藤は、七〇年安保への移行を条文上の改正によって一挙になし得るものでないことを知っている。アジア核安保への移行は、ベトナム戦争の直接後方基地化、核導入の布石、現行安保の事前協議事項の空洞化、等々の一連の政治的前提を積み上げつつ促進されていくのである。

もとより、佐藤の侵略加担のこの様な露骨な具体化は、さまざまな抵抗・阻止の条件を他方の極に成熟させている。第一に、沖縄人民のB52撤去闘争の高揚は、沖縄を安定した侵略の第二戦線に使おうとする、日米独占の意図を大きく制約している。第二に、すでに、内なるベトナムに転化しつつある、日本の参戦国体制への急展開は、日本人民の内部に、深刻な反戦・反政府意識を流動させている。エンプラ寄港時に醸成された佐世保の市民感情と等質なものが、底流に渦まき始めている。とくに侵略拠点現地の地元の住民層の政治的活性化、左傾化は随所にみうけられる。この意識の特徴は、一般的な反戦・反核意識というよりも、反政府に転化する戦闘的な反戦・反核意識として特徴づけられる。一方の対極における、本土の直接後方基地化という質的に高度化した反動系列の展開は、他方の極に、反戦ー反核ー反安保への国民の結集を促進している。

自治会共闘の旗 野戦病院正門にひるがえる

野戦・B52の全国闘争化！ 戦犯佐藤反動内閣打倒！

以上で明らかな様に、今春期の闘争は「侵略拠点を通じての参戦国体制への移行」を阻止する安保前段第二波闘争である。闘争の基本性格は、佐藤が＜本土ー沖縄をベトナムと直結させ、総基地化する事を通じ、アジア核安保への接近を目ざして、その頂点に沖縄B52問題を設定している＞以上は、沖縄ー安保闘争でなければならない。沖縄B52の問題は、①ベトナムへの直接爆撃行為、②B52は核戦略爆撃機、③核基地撤去・返還闘争の具体的焦点であるという要素によって、アジア核安保そのものを体現している。

われわれは、佐藤政府が、B52問題を住民の公害・福祉問題としてのみとらえ、政治的軍事的意義を「安保体制による協力」という論理で国民に承認を迫っている事を忘れてはならない。さらに「核・戦略体系の中心にたつ空母・原潜・戦略爆撃機でも、核を搭載・積載していなければ、領空・領海の通過・寄港は現行安保に抵触しない」という危険な論理を軽視してはならない。沖縄B52撤去の闘争は、かかる政治過程を暴露・宣伝しつつ全国的、全人民的な焦点として闘い抜かなければならない。

今春期の中心軸は、沖縄返還の戦略的目標を一般的な対政府要求闘争として啓蒙的に展開するのではなく、本土ー沖縄を結合する侵略拠点包囲・撃破の具体的な焦点を設定し、これを基軸に政府のアジア核安保への接近を粉砕する構造をとらなければならない。B52撤去と、王子野戦病院開設粉砕の闘いを早急に全人民的運動課題に設定しなければならない。四月闘争は、野戦、B52闘争が現地闘争に主導され一定の国民的焦点に上りつつも、なお決定的な全国民的流動化をつくりだしていない限界を突破する任務を帯びている。

現地闘争の 春期休暇中の 高揚は、持続的な現地抵抗部隊を、沖縄県民、王子住民の中に創出した。佐藤政府が偽瞞的ポーズを出さざるを得ないのも、この様な先進的な現地闘争によって支えられた侵略拠点での具体的力関係の存在である。

かかる有利な局面を全人民的侵略拠点包囲撃破闘争によって、安保闘争の 質に引きあげる任務が要請されているのだ。目的意識的な、B52、野戦闘争の全国的運動化を追求しなければならない。

この任務を放棄した上での、現地集中主義、現地動員主義は誤りである。

われわれは、野戦3・28、31、4・1闘争によって、自治会共闘の現地への進出、現地区民との生きた連帯を築きあげた。この地歩を更に全国的な動員によって拡大しつつ、全国的包囲の体制を早期に実体化しなければならない。

4・26、全国拠点校先駆ストライキ4・27、28、野戦・国会包囲デモはかかる位置づけの下に準備されている。四月闘争の特殊な急展開は、①B52、野戦闘争の全人民的焦点化を、闘争の目的意識

全国学生自治 七月結成をかち

今春期闘争の基本課題、運動構造、獲得目標を概括した上で、今春期闘争の戦線統一に果す決定的役割を 明確にしなければ ならない。三派「全学連」は、中核とブンド＝解放ブロックに大きく二分し、三派「全学連」は事実上解体したに等しい。三派「全学連」の自己分裂の促進と、民青「全学連」のヘゲモニーの決定的喪失は、戦闘

4・15	野戦闘争 関東地
4・26	全国拠点校 ス
4・27	野戦闘争 全国
4・28	国会包囲 全国

主張

学生は七〇年めざし強固な戦線の統一を

1

砂川・羽田、佐世保闘争を経て、今日の王子・成田闘争の爆発にいたるまで、学生運動は、ベトナム反戦闘争を一つの主軸として発展してきた。学生戦線の大衆的統一を志向する自治会共闘、ならびに統一の中核としての民主主義学生同盟もまた、このベトナム反戦闘争をたたかいぬくなかで、発展をかちとってきた。

とくに、現在、王子野戦病院開設阻止のたたかいに結集した自治会共闘、民学同の戦闘的学生部隊は、三月二十八日、「三派系」全学連との強烈な共同闘争を組織した後、二十九、三十、三十一日と独自な連続闘争を敢行し、市民諸組織や高校生諸組織との 共同行動をも 発展させた。そして、これらの波状的発展の上に、劇的なジョンソン演説が発表された四月一日夜、反戦青年委員会、「三派系」全学連とともに二千名の抵抗中核を形成しながら、一万に近い市民と固く結合して、大闘争を爆発させ、機動隊の暴圧に抵抗する数時間におよぶ激闘を首都のどまんなかでたたかいぬいた。

このたたかいの現場で闘争に参加した市民榎本重之氏が機動隊によって虐殺され、自治会共闘、民学同の学友も素手のまま機動隊の集中的な暴行をうけ、数十名にのぼる重傷者、数十名にのぼる逮捕者を出すにいたった。この首都における激烈な闘争の大爆発こそが、ジョンソン演説のギマン的策略を封じこめ、演説を大平和攻勢への契機に活用する道を、最も迅速に、最も鮮明にさししめしたものであった。

2

ジョンソン演説は、ベトナム反戦闘争の最終的勝利に向っての画期的な新しい局面を、客観的につくりだす契機となり、大平和攻勢をよびおこす契機となるであろう。もとより、帝国主義者の善意や誠意に期待したり、それを信じたりすることは、いついかなる場合にもナンセンスである。現に、死物狂いになっているジョンソンの狡猾きわまるかけひきとギマンは、タンホアの盲爆、一〇〇波を越えた北爆、一万三千五百名の増派、二五億ドルの追加戦費の決定などとして、だれの眼にも即刻その場であきらかに透けて見えている。それがあまりにも露骨であればあるほど、ジョンソンは逆に、「つぎはハノイの番だ」とデマる政治的もとでを自ら失なう結果になってしまうのだ。

王子闘争をたたかいぬきつつある全学生にとって、ジョンソン大統領演説の試金石、「北爆を支持したことはない、ベトナム和平の一日も早からんことを」と図々しい国会答弁を行なっている佐藤首相の試金石が、なによりもかによりも、王子野戦病院開設を即時にとりやめることにあることは、自明なことである。ベトナム戦争をやめるということがもし真実であるならば、野戦病院などというものが、それも東京のどまんなかになぜ必要であるのか？

敵が小賢くも「和戦両用」などとほざくならば、われわれもまた和戦両用で行こうではないか。戦闘の強化そのものによって「話し合っ」ているベトナム人民と同じように、われわれも王子闘争を中心とする大平和攻勢の強化によって、帝国主義者の「和平企図」を打診しようではないか。四・二六国際学生反戦行動デーを全学ストライキ・集会・デモでたたかい、四・二八沖縄デーを王子野戦病院ゲート前に全国から大集結してたたかおう。そのことによって、本年秋のアメリカ大統領選挙までの一大追撃戦の火蓋を切り、ベトナム戦犯佐藤内閣を打倒する決定打を組織しよう。

3

この四月に全大学に進学した新入生諸君は、七〇年闘争をになう学生運動の主力部隊になってゆかざるをえない。京大生山崎博昭君の血の犠牲の上に強行された、ジョンソン・佐藤共同声明による帝国主義者の七〇年路線は、佐世保・王子とあいつぐ打撃を蒙ることによって、半年を出でずして破産に追いこまれつつある。山崎君の犠牲は、けっしてムダではなかった。

大平和攻勢の展開のなかで、ジョンソンがけを残して消え去り、その「責任あるパートナー」佐藤栄作もまた三選不可能の状況に追いこまれるならば、ジョンソン・佐藤共同声明路線は七〇年を待たずして、本年中に瓦解してしまうのである。すべてのベトナム反戦勢力、なかんずく戦闘的な行動部隊としてその先頭に立ってきた学生運動にかけられている使命は、いよいよ緊急かつ重要である、といわなければならない。

「今日、われわれは、戦後最大の金融危機つまり国際貿易、金融の基軸であるドルの危機に直面している」と泣訴しているジョンソン演説は、ベトナム危機とドル危機にふたつながら直面させられたアメリカ帝国主義の苦悶を如実にあらわしている。アメリカ帝国主義が、戦後資本主義世界の金融的・経済的基軸ならびに政治的・軍事的基軸として、ドルと核の傘によって世界資本主義を統一的に編成してきたことを思うならば、このジョンソンの苦悶は、ひとりアメリカ一国にかかわることではなく、世界資本主義全体の激動期への根本的再編の苦悶を意味している。

ジョンソン演説自体が、ドル危機とベトナム危機とをなんとかして分離しながら、ベトナム危機の解消によってドル危機の最後的爆発を一刻でもひきのばし、延命の時間をかせごうとする必死の政治的企図にほかならない。「ドル・円一体化」の帝国主義日本は、この世界的激動に最もはげしくさらされるであろう。七〇年闘争が、ベトナム反戦のさなかでたたかわれるにせよ、アフター・ベトナムのなかでたたかわれるにせよ、さらにまた、ドル危機の最後的爆発と重なりあうにせよ、そこに若干のずれが生じるにせよ、安保・沖縄闘争・反独占構造闘争として、巨大な爆発力を蔵しており、日本の社会主義革命への道において重大な里程標となることは、明瞭である。

七〇年闘争をめざして、反安保・反独占統一戦線の有力な一翼としての学生戦線を統一し、名実ともに単一の全学連を再建する任務は、きわめて重要である。ベトナム反戦自治会共闘を全国的に強化せよ。学費闘争・教育学園闘争を全面的に発展せしめよ。学生運動の統一的・戦闘的中核として の民主主義学生同盟を 強化せよ。統一全学連をになう単一学生同盟の創設に向って前進せよ。「批判の自由、行動の統一」の旗印の下、学生自治会に基礎を置く真に大衆的統一的な全学連建設に向って、たゆみなく前進せよ。すべての学生を単一の全学連へ！すべての学生共産 主義者は直ちに わが共産主義労働者党へ！

声

四・二六反政府拠点 病院開設阻止現地闘 沖縄返還国会包囲闘

全国の戦闘的な学友諸君！

四月一日のジョンソン声明は

た。

ドル危機とベトナム危機の最

ソンソンの思惑をのりこえて、反

模な流れを創りあげつつある。

かかる国際的条件の変化は、

化の条件を急速に作りあげつつ

本年一月エンタープライズ闘争の中で

ら追撃戦へとその巨大な前進を

沖縄からB52を撤去させ、王子

今こそ、ベトナム戦犯佐藤内閣

われわれは、四・二六国際学

に鉄ついを加えることを決意し

われわれは、四・二六反政府

現地闘争、四・二八沖縄B52撤

とを決意している。

われわれは、全国学生自治会

のさらなる前進のためあくまで

一九六八年四月三日